

東京 2016

岡部 優真¹⁾

Tokyo2016

Yuma OKABE

Key words : Athletics, Triple Jump, Athlete

キーワード：陸上競技, 三段跳, アスリート

「東京オリンピックがちょうど30歳の年なんですよ」

2016年リオデジャネイロオリンピック以降、いつまで競技を続けるのかを問われる機会が増えると、私はそんな言葉で返すようになっていた。質問に対する答えになっていない事は分かっていた。高校2年生から、本格的に陸上競技の三段跳に取り組み、オリンピック候補と呼ばれるまでの選手になったことがある。そんな、アスリートとしてのプライドか、これまで応援してくれた方々への申し訳なさからか、「競技人生最後の目標として、東京オリンピックを目指しているのだろう」そう受け取れるような言葉を返しながらも、結果として、東京オリンピック出場を目指してピットに立つことはなかった。

2020年夏季オリンピックの東京誘致が決定したのは、2013年の9月のことである。当時、私は23歳だった。三段跳という競技は、大きな怪我さえしなければ、比較的競技寿命の長い種目だと思う。スピード感や、キレの衰えによる記録の低下は、ある程度技術でカバーすることができる場合があるからだ。しかし、一般的なピークは20代中盤といったところか。30歳は、ピークをやや過ぎているとはいえ、十分にチャレンジできる年齢

だった。実際に、東京オリンピックが開催されたのは、31歳になる2021年となったが、多くの同年代選手が出場したことから、それは明確である。しかし、このタイミングでの東京オリンピック誘致の決定は、私の競技人生の歯車を、徐々に狂わせる事となる。

陸上競技に出会ったのは、中学校に入学してからだった。初めて三段跳の試合に出場したのは中学2年生だったと記憶している。中学では三段跳の全国大会はなく、あくまでも副専門種目だったが、15歳くらいから30歳まで、年数にして15年程度、三段跳選手だったことになる。順調に記録は伸び、高校2年生以降は、三段跳が主専門種目になった。その後、自分が置かれたカテゴリーでは、常に日本のトップレベルで戦ってきた自負はある。そして迎えた、2012年ロンドンオリンピックの開催年、私は大学4年生だった。その年は、4月のシーズンインから好調を維持し、負けなしの状態だった。最終選考会である日本選手権においても、初優勝したが、ロンドンオリンピックの参加標準記録には届かず、選考の対象とはならなかった。表彰台では、初めて日本選手権で優勝した嬉しさが大きかった。しかし、クールダウン中、徐々に悔しい気持ちが込み上げてきた。競技場を後

1) スポーツ学部

にしながら、当時お世話になっていたトレーナーの方へ、電話で結果を報告した際、私の第一声が「ダメでした」だったことは、鮮明に覚えている。そしてその一言が、ロンドンオリンピック出場を目指していた（目指している）という事が分かるように明言した、唯一の言葉だった。結果として、その年の日本選手権優勝が、最もオリンピック出場へ近づいた瞬間だったのだが、当時は知る由もない。

私が不言実行という言葉を知ったのは、小学生の頃に通っていた学習塾で配られた、国語の教材だった。読み物の詳細は覚えていないが、子供ながらに何か格好良さを感じたのだろう。本来の意味を少々履き違えているが、中学生になる頃には、友人から「勉強やった？」と聞かれると「全然やってない」と答え、裏で必死に勉強しているようなタイプになっていた。所謂「コソ勉、コソ練」タイプである。そのまま大きくなった私が、「ロンドンオリンピック出場を目指します」と言った類の目標を、口にすることはなかった。

ロンドンオリンピック出場を逃した翌年、東京オリンピック誘致が決定し、強化選手の若返りが図られた。それまでの私は、日本の強化指定合宿、練習会等では、まだ若手の立ち位置であった。しかし、年下選手の割合が急増し、突然ベテラン的な立ち位置になった。当然焦りが生まれる。その焦りからか「リオデジャネイロオリンピック出場」という目標を、よく口にするようになっていた。もちろん、目標を口にしたからと言って、結果が伴わないのが勝負の世界である。そもそも、そのような言動は、「コソ勉、コソ練」タイプである私の性に合っていなかったのだろう。慣れないことをすると、どこかに歪が生まれるものである。「出場を目指す」と公言していたリオデジャネイロオリンピックだが、最終選考会である2016年6月の日本選手権を、万全の状態を迎えることはできなかった。2015-2016年の冬期トレーニング期間に、明らかなオーバートレーニングによって、右の

恥骨を疲労骨折した。日常生活でも強い痛みを感じ、半年ほどは歩くだけで精一杯となり、日本選手権のピットに立つことはできたのだが、ただの記念出場だった。それ以降、何かを目指して本格的なトレーニングを積むことはなくなった。疲労骨折が治ると、試合へは出場する機会はいくらかあった。半年ほどの休養によって、身体がリフレッシュしたのか、あるいはプレッシャーからの解放からか、2020年の日本選手権では8位に入賞するなど、しばしば好成績を残すこともあった。周囲は復調かと勘繰り、そんな頃に、冒頭のようなやり取りをする事が多々あったのである。「東京オリンピック出場を目指してピットに立つことはなかった」と述べたが、少し違うのかもしれない。私の中での東京オリンピック出場を見据えた挑戦は、2016年で既に終わっていたのである。

2016年の怪我をきっかけに、セカンドキャリアを考えるようになり、当時勤めていた企業を退職、大学院へ進学した。幸せな事に、現在は大学で、多くの学生選手を指導する立場にいる。今後、コーチングの一環として、試合に出場することがあるかもしれないが、純粋に競技者として高みを目指すことはないだろう。この場を借りて、競技者として一線を退く（人知れず退いていた）ことを記したい。

何も言わずに目指したロンドン。目指すと言って目指したりオデジャネイロ。目指していると思わせながらも目指さなかった東京。いずれのオリンピックも出場はしていないのだが、仮に「目指した」事を「実行」とするのであれば、不言実行のロンドン、有言実行のリオデジャネイロ、不言不実行の東京だったと言える。そして、最も近かったのがロンドン、最も遠かったのがリオデジャネイロであった。競技人生よりも長いであろう、これからの指導人生に、この経験（教訓）をどのように活かすことができるだろうか。今は未知数であるが、様々な選手の競技人生に寄り

添う中で、自分なりの答えを見つけたいと思う。とりあえず、私はまだ「教え子からオリンピック選手を」と口にしたことはない。